

幼小連携における実態と課題を探る

徳永 静江

1. はじめに

遊びや生活を中心とした幼稚園教育と、教科等の学習を中心とした小学校教育とでは、教育の内容や方法、環境などにおいて明らかに違いがあり、それは幼児にとって大きな段差となっている。まず、幼小間における段差とはどのようなことかについて考えたい。

小学校に入学する幼児にとっての段差と考えられることは、後に示すアンケート調査項目の間7の内容が考えられる。例えば、「ア 総合的な遊びを中心とした生活と各教科等の学習を中心とした生活」「イ 教師の子どもに対する声かけや支援の仕方の違い」「ウ 一日の柔軟な生活時間と時間割に基づく学習時間」「エ 遊びや生活への配慮がされた環境と、学習への配慮を中心とした環境」「オ 友達や教職員などとの人間関係や人的環境の違い」「カ 施設の広さや大きさ、掲示、色使いなどの物的環境の違い」「キ 最年長の学年から最年少の学年になることへの戸惑い」などが挙げられる。幼児にとっての段差は、校種の違いによる教育内容や指導の方法、学校全体の環境や学習における環境など様々なものが考えられる。

このような生活の変化に子どもが対応できるように、教師は適切な指導を行うことが必要である。しかし、生活の変化が大きすぎると、子どもはその生活の変化にうまく適応できないこともある。子どもは、小学校入学を機会にこれまでと違った存在になるのではなく、子どもの発達と学びは常に連続していることから、幼稚園教育と小学校教育の滑らかな接続を図ることが必要になってくる。

先に述べた段差は、幼児にとって無くしたり、少なくしたりすることがよいと考えるのではなく、幼児の成長・発達にとって必要な段差があるのではないかと。また、すでに存在する段差に対して、教師が指導上配慮することで、幼児の生活や学習の負担を軽減することが予測できる場合もあるのではないかと。大切なことは、これらを見極める目をもつことである。例えば、幼小の教育課程の内容による段

差は、幼児の発達に応じた教育を進める上で必要と考えられる。同じくイヤウの具体的な指導の方法や時間の区切り、エの環境の違いなどは、教育内容の違いからくる段差であり、これらも幼児にとって必要な段差と考えられる。

また、オヤカ、キなどから幼児にとっての不安や戸惑いなど、心情的に配慮した方がよいと思われる段差もいくつかある。これらの段差は、教師が指導する際、十分に配慮することにより、不安や戸惑いから安心感へとつなげることができるのではないかと。

幼児の成長・発達にとって必要な段差と、教師が配慮することによって、その成長・発達を一層促すことができる段差とがあることに注目する必要がある。

では、先に挙げたアからキに見られる段差は、幼稚園と小学校の双方がどのようなことに留意し、段差を滑らかにしていけばよいのだろうか。

平成17年1月、中教審より「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼稚園教育の在り方について」答申が出された。その中では、今後の幼児教育の在り方として2つの方向性が示されている。1つは、「家庭・地域社会・幼稚園等施設の三者による総合的な幼児教育の推進」であり、2つには、「幼児の生活の連続性及び発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実」である。さらに、幼児教育の充実のための具体的な取り組みも示された。

「発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実」では、具体的な施策として、第1に小学校教育との連携・接続の強化・改善を挙げている。

折りしも、平成18年12月、60年ぶりの教育基本法が改正された。平成19年6月には、学校教育法も改正され、平成20年3月の「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「学習指導要領」の改訂をみた。

「幼稚園教育要領」第3章第1 2 特に留意する事項では、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続において、「幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため、幼児と児童の交

流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会を設けたりするなど、連携を図るようにすること」としている。

また、「小学校学習指導要領」第1章 総則 第4指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項(12)において、「小学校間、幼稚園や保育所、中学校及び特別支援学校などとの間の連携や交流を図るとともに、障害のある幼児児童生徒との交流及び共同学習や高齢者などとの交流の機会を設けること」とある。

すでに、幼稚園と小学校間においては、幼小間の段差に配慮し、様々な交流活動や連携を行い、幼児・児童にとつての滑らかな接続を図っている実態がある。

幼小連携におけるこれまでの先行研究としては、「小学校との連携を深める教育課程の開発—個性と社会性が調和して育つ有馬の子の育成」の研究テーマで東京都中央区立有馬幼稚園が平成13年度3年間の研究の成果を発表している。また、「幼小の連携—幼小連携の教育課程開発に向けて」のテーマを掲げて平成13年度鳴門教育大学学校教育学部附属幼稚園が研究に取り組んでいる。さらに、平成16年度、京都市総合教育センターが行った「就学前教育と学校教育の連携・協力の充実をめざして—保・幼・小の教職員の意識調査とフィールド調査からみた現状と課題」などが挙げられる。

これらの先行研究は、主として実践を中心としたものであり、本研究は、直接幼児児童の教育に当たる教員を対象にした意識調査であることに意味があると考えられる。

以上のことから、幼稚園や小学校においてどのような実践が行われているか実態を探り、教員の意識や考え方をとらえるとともに接続の必要性と課題を明らかにしていく。

2. 研究のねらい

○ 幼小連携における実態を探り、幼小間の滑らかな接続の必要性と課題を明らかにする。

3. 研究の方法

- 幼小の連携に関するアンケート調査を実施し、分析・考察する。
- アンケートの調査対象は、幼稚園の5歳児担任、小学校の1年生と4年生担任とし、同一アンケート項目で比較調査を行う。
- 対象地域は、主に東京都内とし、無作為である。
- * 小学校教員を1年生と4年生担任とした理由は、1年生は5歳児の発達の連続線上にあること、4年生は接続の意識が薄らぐことを予想し、結果を確かめるためである。

なお、調査方法は往復とも郵送による。

4. 研究の内容と考察

(1) 幼小の連携に関するアンケート調査方法

- アンケートの調査項目問1から問9に関して5歳児担任、1年生担任、4年生担任の順に回答が多かった項目から挙げていく。
- アンケート調査期間 平成20年6月～7月
- アンケート回答者 5歳児担任60名中50名
1年生担任60名中41名
4年生担任60名中28名

* アンケート項目の内容 別紙資料参照

(2) 結果の考察

問1 今、担任しているお子さんのことで気になることがありますか。それは、どのようなことですか。以下のあてはまる項目から5つ○を付けてください。

<5歳児担任の場合>

- ① 知っていることを言わないではいられない (16%)
- ② 物を大切にしない (14%)
- ③ 教師の全体への話を聞くことができない (13%)
- ③ 自分の考えていることを伝えることができない (13%)
- ⑤ 自分の物を整理整頓ができない (12%)
- ⑤ 好き嫌いが多い (12%)
- ⑦ 人の嫌がることを言ったり、したりする (10%)
- ⑧ すぐ「疲れた」という (10%)

<1年生担任の場合>

- ① 好き嫌いが多い (21%)
- ② 教師の全体への話を聞くことができない (16%)
- ③ 時間を意識して行動できない (13%)
- ④ 人の嫌がることを言ったり、したりする (12%)
- ⑤ 知っていることを言わないではいられない (11%)
- ⑤ 自分の物を整理整頓ができない (11%)
- ⑦ 根気がない (8%)
- ⑦ 友達とのトラブルが多い (8%)

<4年生担任の場合>

- ① 時間を意識して行動できない (18%)
- ② 物を大切にしない (14%)
- ② 教師の全体への話を聞くことができない (14%)
- ② 好き嫌いが多い (14%)
- ⑤ 自分の考えていることを伝えることができない (11%)
- ⑤ 自分の物を整理整頓ができない (11%)
- ⑦ 行動が遅い (9%)

⑦ 人の嫌がることを言ったり、したりする (9%)

[分析・考察]

○アンケートの調査結果から5歳児担任、1年生担任、4年生担任に共通していることは、「教師の全体への話を聞くことができない」「自分の物を整理整頓ができない」「好き嫌が多い」「人の嫌がることを言ったり、したりする」ことである。5歳児の頃から4年生に至るまで引きずっている課題といえる。また、それぞれの発達段階において、新たな出来事につぶかることで、同様の課題が生じていることも考えられる。

○次に5歳児と1年生担任に共通しているのは、「知っていることを言わないではいられない」幼児・児童が多いことである。双方の学年で人の話を聞く、自分の考えを話す習慣が身に付くような指導が求められる。

○1年生担任と4年生担任に共通している項目は、「時間を意識して行動できない」ことである。幼稚園での柔軟な生活から1年生になって、時間割に基づいた学習と生活の中では、なかなか時間を意識した生活に馴染めない実態といえる。ここに幼小における段差を見ることができ。しかし、4年生になってもまだ「時間を意識して行動できない」という状況は、学年での指導の見直しとともに、家庭との連携も必要と考えられる。

問2 問1のような姿が見られる主な理由を下記の中から2つ選んで○を付けてください。

各項目の選択率(%)の学年差

項目	5歳児 (50人)	1年生 (41人)	4年生 (28人)
① 家庭の教育に問題や課題がある	44%	47%	55%
② 少子化の進行や社会の変化に要因がある	32%	35%	35%
③ 就学前の教育に問題がある	19%	10%	0%
④ 地域の教育に問題や課題がある	1%	0%	0%
⑤ 小学校の教育に問題がある	1%	5%	4%
⑥ その他	3%	3%	6%

[分析・考察]

○5歳児、1年生4年生の担任とも主な理由の1番目に「家庭の教育に問題がある」としている。幼稚園や小学校での生活や学習面において、家庭のしつけや教育方針の影響が懸念されることは否めない。また、2番目に「少子化と社会の変化」を挙げている。地域で子ども同士の遊びや体験の場が少なくなり、子どもが育つための必要な体験ができにく

くなっていることが考えられる。

○次に5歳児と1年生の担任は、「就学前の教育」に問題があることを指摘している。幼小間における様々な段差の内容を双方がどのように受け止めて理解し、滑らかなものにしていくかが課題である。

○「小学校の教育に問題がある」と指摘した担任が3学年を通して10%を占めている。双方が互いの教育の理解に努めつつ、実態を率直に話し合い問題の解決に向けていく努力と工夫が求められる。

問3 保護者の姿で気になることはどのようなことですか。下記のあてはまる項目を5つ選んで○を付けてください。

各項目の選択率(%)の学年差

項目	5歳児 (50人)	1年生 (41人)	4年生 (28人)
① 過保護・過干渉である	20%	18%	21%
② 家庭での生活が不規則である	18%	15%	18%
③ 噂や情報に惑わされる	18%	8%	12%
④ 食生活への関心が薄い	11%	7%	7%
⑤ 幼稚園や学校への要求が高い	10%	16%	12%
⑥ 子どもに過度な期待をする	9%	9%	7%
⑦ 親同士のコミュニケーションがとれない	9%	9%	0%
⑧ 自分の考えが希薄で家庭の教育方針がない	5%	0%	0%
⑨ 放任である	0%	10%	16%
⑩ 習い事を重視する	0%	8%	7%

[分析・考察]

○3学年の1番目に共通している内容として保護者の「過保護・過干渉」がある。「家庭での生活が不規則である」項目も割合が高く、子育てや家庭生活における近年の顕著な実態といえる。また、「学校への要求が高い」保護者の実態は、その対応も含めて昨今の大きな課題である。

○1年生と4年生の「放任」の多さは、入学を機会に、パートなどの働きに出る母親たちの影響によるものかどうか把握する必要がある。5歳児は0%であるため、家庭に対して子どもの生活にかかわる必要な指導を要すると考える。

○5歳児と1年生の「子どもに過度な期待をする」と「親同士のコミュニケーションがとれない」ことも詳しい状況の把握をしていくことが課題である。

問4 幼稚園や保育所、小学校間で連携をしていますか。○を付けてください。

各項目の選択率(%)の学年差

項 目	5歳児 (50人)	1年生 (41人)	4年生 (28人)
連携をしている	89%	82%	50%
連携をしていない	11%	18%	50%

[分析・考察]

○5歳児と1年生は、全体の数値から見ると比較的良好に連携をとっていることが分かる。4年生の場合は、連携をしている所と、していない所が半々である。小学校の中高学年になると、連携の必要性が少なくなることが考えられる。また、学校によって実態は違うため、子どもの発達に必要と思われる連携が行われていると考える。

問5 どのような連携をしていますか。(自由記述)

<5歳児担任の場合>(複数回答あり 回答者総数86人)

- ① 2月頃、小学校を訪問する (19%)
- ② 授業参観をする (15%)
- ② 行事に参加する (15%)
- ② 給食体験をする (15%)
- ⑤ 就学前後に情報伝達をし合う (14%)
- ⑥ 1年生と5年生とが交流活動をする (12%)
- ⑦ 「生活科」の授業に参加する (8%)
- ⑧ 幼稚園の行事に参加してもらう (2%)

<1年生担任の場合>(複数回答あり 回答者総数46人)

- ① 学校参観と授業参観を行う (59%)
- ② 就学前後に情報伝達を行う (33%)
- ③ 運動会などの行事に参加する (7%)
- ④ 給食交流をする (1%)

<4年生の場合>(複数回答あり 回答者総数20人)

- ① 授業参観と交流会を行う (25%)
- ① 行事に招待し、交流する (25%)
- ③ 家庭環境などの情報交換をしている (20%)
- ④ 幼小中の連絡会をしている (15%)
- ⑤ 幼小中で授業参観をしている (15%)

[分析・考察]

○5歳児の担任は、様々な方法で小学校との連携を図っていることが分かる。連携の対象は主に1、2年生の低学年が多い。5歳児にとって年齢に近い学年であることは、今後

の見通しがもちやすいといえる。一方、4、5年生との連携も行われている。4、5年生にとっては、5歳児とかわかることで、自分のよい振り返りの機会ともなる。大切なことは、これらのことが、双方の教育課程に位置付いていることである。

○1年生の担任の場合、「授業や学校参観」とともに就学前後の「情報伝達」の割合が高い。前者は、滑らかな接続を図るための活動だが、後者はそのための方法である。

○4年生になると、連携活動が一段と少なくなってきている。子どもの発達段階や必要な体験などを勘案しての実態と考えられる。しかし、4年生といえども幼児とかわかる体験が生活の中にあることで、自分を振り返ることで自信をもったり、思いやりの心をはぐくんだりする上で大切な活動となり得ると考える。

問6 問5で連携をしていると答えられた方で、今後さらに連携するとしたら、どのような連携をしたいですか。
また、問5で、していないと答えられた方で、今後するとしたらどのような連携をしたいですか。○を付けてください。(複数 可)

各項目の選択率(%)の学年差

項 目	5歳児 (50人)	1年生 (41人)	4年生 (28人)
① 交流活動	22%	18%	18%
② 授業の交流	17%	32%	16%
③ 授業参観	16%	18%	16%
④ 行事への参加	15%	13%	13%
⑤ 合同研修会	14%	7%	16%
⑥ レクリエーション	6%	5%	11%
⑦ 合同授業	5%	5%	5%
⑧ 人事交流	5%	2%	5%

[分析・考察]

○3学年とも「交流活動」「授業の交流」「授業参観」をさらに進めたいと考えている。また、行事への参加を行うことで連携を図っていきたいと考えている担任も比較的多い。

○合同研修会の1年生担任の数値が、5歳児と4年生担任に比較して低い理由を把握する必要があると考える。

○「レクリエーション」や「人事交流」など、教師同士の研修や交流を充実させたいと考えていることが分かる。

問7 就学前の教育と小学校教育の段差について、幼児への影響が大きいと思われるものに○を付けてください。(複数 可)

各項目の選択率(%)の学年差

項目	5歳児 (50人)	1年生 (41人)	4年生 (28人)
① 一日の柔軟な生活時間と時間割に基づく学習時間	25%	34%	35%
② 総合的な遊びを中心とした生活と各教科等の学習を中心とした生活	21%	15%	24%
③ 教師の子どもに対する声かけや支援の仕方の違い	21%	14%	9%
④ 遊びや生活への配慮がされた環境と学習への配慮を中心とした環境	12%	10%	15%
⑤ 友達や教職員などの人間関係や人的環境の違い	10%	13%	13%
⑥ 最年長の学年から最年少の学年になることへの戸惑い	7%	10%	0%
⑦ 施設の広さや大きさ、掲示、色使いなどの物的環境の違い	4%	4%	4%

[分析・考察]

○3学年ともに幼児への影響が大きいと思われるものについて「一日の柔軟な生活時間…」と「総合的な遊びを中心とした生活と…」を挙げている。このことは、幼小の教育方法の大きな違いであり、各担任は率直に受け止め理解をしていると考える。

○また、3学年とも「総合的な遊びを中心とした生活と各教科等の学習を中心とした生活」は、幼小間における大きな段差ととらえていることが分かる。

○5歳児担任と1年生担任では、「教師の子どもに対する声かけや支援の仕方」の違いを挙げている。幼稚園における総合的な遊びを中心とした生活と、小学校での一斉指導が多い生活とでは、当然声かけや支援の仕方は、違ってくる と考える。

○「施設の広さや大きさ、掲示などの物的環境の違い」そのものの影響は、3学年とも少ないととらえている。

問8 小学校教育への接続を意識して活動や指導の工夫をしていることがありますか。○を付けてください。

各項目の選択率(%)の学年差

項目	5歳児 (50人)	1年生 (41人)	4年生 (28人)
ア ある	100%	54%	26%
イ ない	0%	46%	74%

[分析・考察]

○5歳児担任は、全員が幼小の接続を意識して活動や指導の工夫をしていると答えている。1年生担任の場合は、半数以上の教師が連携に取り組んでいる。4年生担任の場合は、連携をしていないと答えている教師が全体の7割以上と非常に多いことが分かる。

○1年生担任の場合、幼小の接続を意識して指導の工夫をしていないと答えた教師が、全体の半数近くいるという背景には、連携したくてもできない幼小間や地域性などの事情があるのではないかと考える。

問9 問8で、あると答えられた方は、どのようなことですか。

<5歳児担任の場合>

- ① 集中して話を聞く機会を意図的につくる (16%)
- ② 時間の流れを意識した生活ができるようにする (15%)
- ③ 生活習慣をしっかり身に付けさせる (12%)
- ④ 机や椅子を使用した活動を多く取り入れる (10%)
- ⑤ 環境に文字や図形などを取り入れる (8%)
- ⑤ 協力、協同的な活動を多く取り入れる (8%)
- ⑤ 数や文字への興味をもてるようにする (8%)
- ⑧ 課題活動を意図的に取り入れる (7%)
- ⑨ 自分の考えを言葉にして伝えられるようにする (6%)
- ⑨ お弁当を時間内に意識して食べられるようにする (6%)
- ⑪ 決まりやルールを守らせる (4%)

<1年生担任の場合>

- ① 1年生と5歳児とが一緒に交流活動をする (47%)
- ② 作業的な活動や歌などを多く取り入れる (32%)
- ③ 幼、保で学んできたことが生かされるようにする (21%)

<4年生担任の場合>

- 学校行事への参加
- 作業的な活動を入れて飽きないようにする
- 幼、保で経験してきたことを大切に

(*いずれも参考意見程度)

[分析・考察]

○5歳児担任の場合、接続を意識しての活動や指導の工夫においては、①の「集中して話を聞く態度」を育てることや②の「時間の流れを意識した生活」ができることに重点を置いていることが分かる。小学校は、時間割による教科指導が中心になることから、大事な視点であると考えている。次に、身の回りの始末など幼児の生活習慣をしっかり身に付けさせることを大事にしている。これらのことが不十分だと授業に間に合わなかったり、落ち着きがなくなったりし、授業の進行を妨げることにもなる。生活習慣の定着は、家庭との連携を十分図ることで効果が期待できる。また、5歳児担任は、環境としての机や椅子、あるいは、環境に文字や数、図形などを意識して幼児の生活に取り込んでいることが分かる。いずれも小学校での教科や指導内容などを配慮した上のことであろうと推察できる。

○1年生担任の場合、5歳児担任の様々な工夫に比べて取り組みの内容が細かく示されていないが、交流活動を取り入れることや、体を使って取り組む作業的な活動が多く考えられている。このことは、幼児の発達段階を踏まえた体験を重視した内容であることが考えられる。4年生担任は、接続を意識した活動として、全体の約4分の1の教師が学校行事への参加や、1年生担任と同様に作業的な活動を取り入れて、幼児の興味や関心を引き付ける工夫をしていることが分かる。

(3)全体考察

○5歳児担任は、幼小間の滑らかな接続を意識して、交流、連携活動に取り組んでいる。その内容の多くは、「小学校訪問」「授業参観」「行事への参加」「給食体験」「就学前後における話し合い」などである。これらは、幼稚園、小学校ともに多くの教師が実践している内容として取り上げている。比較的取り組みやすい活動といえるのではないか。また、様々な活動や指導の工夫を見ると、担任の幼小の接続に対する意識は、非常に高いと思われる。さらに、幼児の気になる姿の多くは、家庭教育や社会の変化に問題があると考えている。幼小の滑らかな接続を図っていくためには、広く家庭教育や地域社会の教育力までも視野に入れて取り組む必要があることを示唆している。

○1年生担任は、幼稚園との連携をしていると答えている人は比較的多いが活動や指導の工夫をしている点では約半数になっている。形としては、連携していても指導の工夫、改善までは、十分取り組めていない状況があると考えられる。また、もっとも連携しやすいと考えられる「生活科」や「総合的な学習の時間」での取り組みが極めて少ないのは、

その原因を今後調査していく必要があると考える。さらに、5歳児と同様に児童の気になる姿の多くは、家庭教育や社会の変化に問題があると考えている。児童の健やかな成長・発達を支えるためには、学校・家庭・地域社会の三者の連携と協力が何より必要である。

○4年生担任は、約半数が何らかの連携をしていると答えているが、活動や指導の工夫をしている点になると、その数は極端に減っている。このことは、4年生位の発達の段階から考えると、段差への配慮は低学年ほど必要としなくなっているといえるのではないか。また、今回のアンケート調査では、4年生全体の回答率が47%と低かったために、これらの数値ですべてを押し量ることはできない。

5. まとめ

幼稚園教育と小学校教育とでは、教育の内容、指導方法、環境などにおいて違いがあり、幼児・児童にとって大きな段差となっていることは、はじめに述べた通りである。幼小間においての段差の解消に向けては、様々な工夫と努力をしていることがアンケート調査の結果分かった。取り組みの実態としては、幼稚園の教師の方が小学校の教師に比べると、活動や指導内容、環境の工夫などに取り組んでいる。また、1年生の担任が4年生の担任に比べると段差をより滑らかにしようとする工夫が見られる。このことから接続の必要性がある対象は、特に幼稚園の5歳児と小学校の低学年と考えられる。しかし、連携の目的によっては、対象は4、5年生がよい場合も考えられる。次に連携の必要性は、アンケート内容の「幼児、児童の気になる姿」から明らかである。「教師の全体への話を聞くことができない」「自分勝手に話す」「時間を意識して行動できない」「身の回りの整理整頓ができない」などは一朝一夕で身に付くことではなく、幼小間、学年間での連携が一層必要である。さらに、これらの問題行動は、学校のみがその責任を背負うのではなく、家庭、地域社会とも連携を図っていくことが重要である。今後の課題としては、今、取り組んでいる交流活動や連携を各学校の教育課程に位置付け、継承していくことである。合わせてこれらの活動を充実・発展させていくための教師の意識と指導力を一層高めていくことが課題である。

6. おわりに

幼小の連携は、相手があるために、うまくいくこともあれば、遅々として進まないこともある。幼児・児童の成長・発達を保障するためには、「地域の子どもは、地域で育てる」姿勢を大切にし、学校・家庭・地域社会がともに

手を携えて取り組むことこそ重要と考える。

<参考文献>

- 1) 中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」 2005年1月
- 2) 「幼稚園教育要領」文部科学省 2008年3月
- 3) 「小学校学習指導要領」文部科学省 2008年3月
- 4) 「幼児期から児童期への教育」 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 2005年2月
- 5) 「学びと発達の連続性—幼小接続の課題と展望」 社団法人全国幼児教育研究協会編チャイルド本社 2006年5月

<参考資料> 幼・小の連携に関するアンケート調査

■ 下記の該当するところに○印を付けてください。

(5歳児担任 1年生担任 4年生担任)

問1 今、担任しているお子さんのことで気になることがありますか。それは、どのようなことですか。以下のあてはまる項目から5つ○を付けてください。

- ア 教師の全体への話を聞くことができない
- イ 座ってられない
- ウ 教師のあげあしをとったり、大声を出したり、乱暴な行為をしたりする
- エ 約束や決まりを守らない
- オ 物を大切にしない
- カ 人の嫌がることを言ったり、したりする
- キ 時間を意識して行動できない
- ク 自分の考えていることを伝えることができない
- ケ 友達とのトラブルが多い
- コ 友達がいらない
- サ 教師に甘えてくる
- シ 知っていることを言わないではいられない
- ス 自分の物を整理・整頓ができない
- セ 好き嫌が多い。食べるのに時間がかかる
- ソ すぐ「疲れた」と言う
- タ 根気がない
- チ 行動が遅い
- ツ はさみなどの基本的な用具の扱い方が身に付いていない
- テ 大人の顔色をうかがう
- ト その他()

問2 1のような姿が見られる主な理由を下記の中から2つ選んで○を付けてください。

- ア 就学前の教育に問題がある
- イ 家庭の教育に問題や課題がある
- ウ 地域の教育に問題や課題がある
- エ 小学校の教育に問題や課題がある
- オ 少子化の進行や社会の変化に要因がある
- カ その他()

問3 保護者の姿で気になることは、どのようなことですか。下記のあてはまる項目を5つ選んで○を付けてください。

- ア 過保護・過干渉である
- イ 放任である
- ウ 学校への要求が多い
- エ 噂や情報に惑わされる
- オ 自分の考えが希薄で、家庭の教育方針がない
- カ しつけや教育に無関心である
- キ 教育に関心が高く、学校に安心してまかせられない
- ク 学校やPTA活動に無関心である
- ケ 習い事を重視する
- コ 家庭での生活が不規則である

- サ 食生活への関心が薄い
- シ 子どもに過度な期待をする
- ス 親同士のコミュニケーションがとれない
- セ その他()

問4 幼稚園や保育所、小学校間で、連携をしていますか。○を付けてください。

- (ア している イ していない)

問5 どのような連携をしていますか。

問6 問5で、していると答えられた方で、今後さらにするとしたら、どのような連携をしたいですか。また問5で、していないと答えられた方で、今後するとしたらどのような連携をしたいですか。○を付けてください。(複数可)

- ア 授業の交流(生活科など)
- イ 行事への参加
- ウ 交流活動
- エ 合同研修会
- オ 授業参観
- カ 合同授業
- キ レクリエーション
- ク 人事交流
- ケ その他()

問7 就学前の教育と小学校教育の段差について、幼児への影響が大きいと思われるものに○を付けてください。(複数可)

- ア 総合的な遊びを中心とした生活と各教科等の学習を中心とした生活
- イ 教師の子どもに対する声かけや支援の仕方の違い
- ウ 一日の柔軟な生活時間と時間割に基づく学習時間
- エ 遊びや生活への配慮がされた環境と、学習への配慮を中心とした環境
- オ 友達や教職員などの人間関係や人的環境の違い
- カ 施設の広さや大きさ、掲示、色使いなどの物的環境の違い
- キ 最年長の学年から最年少の学年になることへの戸惑い
- ク その他()

問8 小学校教育への接続を意識して活動や指導の工夫をしていることがありますか。○を付けてください。

- (ア ある イ ない)

問9 問8であると答えられた方は、どのようなことですか。

ご協力ありがとうございました。